

予測不可能な時代を生きる人材育成のために

藤田哲也

法政大学

会員の皆様もまさに当事者になられていると思いますが、2020年度、2021年度(そしてもしかしたらそれ以降も)大学・短期大学等を取り巻く環境は、新型コロナウイルスに翻弄され続けています。それ以前からも高等教育に対するITの導入は進んでいましたが、2021年度の現在から見れば「あくまでもゆっくりと」歩みを進めていた状態だったといえるでしょう。それが2020年度からは教育環境が激変しました。私が所属している法政大学でも2020年度前期には「原則としてすべての授業はオンラインで実施」となりましたので、授業を準備する教員も、授業を受ける学生たちも、否応なしに「新たな環境への適応」を求められたわけです。初年次教育も例外ではなく、少なくとも2020年度は原則としてオンラインで行わなくてはならない大学・短大がほとんどであったでしょう。入学直前まで「生徒」だった子たちのすべてを取りこぼしなく、速やかに「学生」に移行させるというだけでも簡単なミッションではありません。高校時代までに身につけている学習習慣や基礎学力、価値観、学習に向かい合う態度(動機づけ)が多様であることがミッションを困難にしている一つの大きな原因ですが、そこにコンピュータリテラシーの個人差がこれまで以上に大きく影響を及ぼすようになりましたし、学生本人に帰属できない「家庭でのIT環境(自分専用のPCやタブレットを所有しているか、Wi-Fiが無制限に快適に使えるか等)」の格差にも十分な配慮をする必要性がありました。本来の対面授業であれば、学生相互の助け合い・教え合いという協同も期待できたところですが、完全オンラインでは協同どころか友だち作りの段階から困難が待ち受けています。もちろんそういった問題は2021年度の現在でも解決されているわけではありませんが、2020年度の初頭に一気に表面化してきたことに、我々教職員は向かい合わざるを得なかったといえるでしょう。本学会でも、とりわけ年次大会の開催形態については従来の経験の蓄積だけでは立ちゆかない新たな対応を迫られ続けていますが、常に最善の選択ができるようがんばっていきたいと考えています(今号に掲載している、第14回大会報告も併せてお読みいただければ幸いです)。こうした新型コロナウイルスを中心とした環境激変に適応した初年次教育の在り方については、本号掲載の大会関連論文が大いに参考になるとと思いますし、皆様もそれぞれにご尽力されてきたことと思います。

数年後には、この新型コロナウイルス感染拡大への数々の対処について、「あのときは大変だったね」と懐かしい苦労話に…つまり過去の話になっていることを願って止みませんが、2021年度も終盤にさしかかった時期にはオミクロン株が猛威をふるっており、まだまだ先が見通せない状況が続いています(今号が発行される頃には既にピークアウトしていることを願っていますが)。

さて、こうした新型コロナウイルスへの対応を続けることは、確かに大変なことですし

疲弊を感じておられる方も多いと推察いたします。しかし私は大学の教員として、これを「教育実践にとっての好機」と捉え直すことで前向きになれるのではないかと、個人的には考えるようにしています。2018年に出された中央教育審議会の「グランドデザイン答申」の冒頭でも、「2040年の展望と高等教育が目指すべき姿」の中で、「予測不可能な時代を生きる人材」として「時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材」の育成の重要性が述べられています。この答申が出された2018年においても新たなテクノロジーやグローバリズムに継続的に適応していくことが重視されているのですが、2020年度以降は大学教育環境の急激な変化が現実のものとなり、それ以前のノウハウだけではどのように対応すればよいのか解決策が容易に見いだせないという、まさに「予測不可能な時代」に突入したといえるでしょう。

ゆるやかな変化の流れの中においては「予測不可能な時代を生き抜く」という目標は、今の学生たちはもちろんのこと、我々教職員にとってもあまり現実感が伴わないものであったかもしれません。しかし2021年度の現在では、皆様はまさにそうした「予測不可能な時代を生き抜くために」何が必要か、こういった工夫が有用なのか、個人を超えて、社会全体で叡智を結集すべき課題として実感を持って向かい合っておられることと思います。我々教職員が実感を伴って、学生たちに「予測不可能な時代をいかにして生き抜いてきたか」を語ることができる経験を得ていることは、平常時には望んでもそうやすやすとは叶わないことだと(多少無理矢理にですが)ポジティブに捉えることもできるのではないのでしょうか。誤解がないように申し添えますが、何も「新型コロナウイルスのもたらす災厄を歓迎して受け入れよう」とか「ご自身あるいは身近に感染した人が大変に辛い思いをしていたとしてもそれをネガティブに捉えるべきではない」と無理強いしているつもりはありません。ただ、現実には起こっている困難や悲しむべき状況への向かい合い方の一つとして、「転んでもただでは起きず」むしろ「この逆境から多くの教訓を引き出す」という心の持ち方も有用だろうと考えている次第です。また、単なる精神論で乗り切ることを推奨しているわけでもなく、同じ問題状況に遭遇しても、それを回避することだけに注力するよりも、いかにして乗り越えるかという見方をもって臨むことで、今後の新たな「予測不可能な問題」に備えることも重要だろうと思っています。

以上、長くなりましたが、設立から14年目となる2021年度に、新たに就任した会長から会員の皆様へのメッセージとしてお読みいただければ幸いです。本学会がこれから直面する様々な課題に対して、これまでの学会運営の蓄積を尊重しつつも、保守的になりすぎず、変わることをいとわず、柔軟かつ最善の対応をしていきたいと思っています。会長をはじめ新体制となりましたが、これまで以上に会員の皆様のご協力を賜りたく存じます。

(初年次教育学会会長)